

琉球大学学術リポジトリ

「ひめゆり」の読まれ方：
映画「ひめゆりの塔」四本をめぐって

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2387

「ひめゆり」の読まれ方

——映画「ひめゆりの塔」四本をめぐって

仲 程 昌 徳

一九九五年六月号『シナリオ』第五十一巻第六号は、「『ひめゆりの塔』脚本家インタビュー」として、「いまなぜ『ひめゆりの塔』か」の見出しで、加藤伸代の談話を掲載している。加藤は、そこで「ひめゆり」を脚色するにあたって、「どういう取り組み方」をしたのかを問われ、「前の作品には、まったくとらわれないでいこう」と思ったと答えていた。

「前の作品」というのは他でもなく加藤が脚本化した「ひめゆり」以前に上映された「ひめゆり」作品を指している。加藤の言は、「『ひめゆり』は、今まで三回映画化されてるわけですが、最初の今井（正）監督のは、昭和二十八年ですから、この時はまだ沖繩で何があつたのか、一般の国民は、あまり知らない時期だつたと思うんですね、沖繩が玉砕してアメリカに占領されたというふうには。それから、戦争というものについては、戦後間もなくですから、皆さんがその体験者だつた時期ですよ。／＼そして、二回目の今井監督の作品（昭和五十七年）というのはシナリオは前と同じく水木（洋子）先生の本ですけど、二十八年の時のままなんです、ほとんど手が入られてない。／＼で、今度、もう一度やるというお話で、私は自分自身、ぜんぜん知らない世代ですから」に続いて発された決意の一言であつた。

加藤は、「ひめゆり」がこれまで「三回」映画化されているという。そして、同一の脚本に基づく同一の監督の

手になる一九五三年の作品と八二年の作品二作についてだけふれ、あと一作については何故か触れてない。

加藤が触れてないあと一作は、一九六八年九月二十一日に封切られた「あゝひめゆりの塔」である。¹八木保太郎、若井基成、石森史郎脚本、舛田俊雄監督になる第二作目の「ひめゆり」は、米軍の上陸という「悲惨な運命の中におかれてもなお失われなかつた彼や彼女たちの青春をうたい上げようとしているが、できればいいとはいえない。ドラマ自体が幼稚である上に、それを演じる俳優たちの演技もまたおさなひ」と評されたものである。²加藤が第二回目の作品である「ひめゆり」について触れてないのは、評に見られるように、作品の出来栄えがそれほどのものではないと見たことよっているのかもしれない。

舛田の作品は、今井の第一作からすれば、全く無視されたに等しいといつていいほどであった。今井の第一作は、「期待に背かぬ力作が出来上がった。戦後公開されたイタリア映画の迫力よりも勝れ、しかもその底に今井正演出は全編にわたつて時情をみなぎらせている。二時間を越える長さをいささかもタルミなく引つばつていく。日本映画も黒沢明やこの今井正などによつて、たしかに世界的レベルに達していることを見る人々は改めて確認するであろう」と絶賛されたばかりでなく、「東映作品、今井正監督『ひめゆりの塔』は予想以上の人気を呼び、興業収入約一億八千万円が確実視され他社の正月作品を圧倒して邦画史上最大の成績を記録するだろうとみられるに至つた」と書き立てられたもので、「おそろしく評判になった作品である。いや、評判というより人気があると云つた方がいいかも知れない」といったように驚きの言葉が連ねられた作品であった。

今井の二作目は、加藤が語っていたように「二十八年の時のまま」で配役が変わつただけのものであった。「旧作は、まさにこれをどうしても作らなければという勢いのこもつた作品だったが、こんどはその勢いというものがやはり薄い」と評された。今井の新作は、好評をもつて迎えられたとはいいいがたいが、「ひめゆりの塔」といえば

今井作品を描いてはなかった。「ひめゆりの塔」ということになれば、まったく新しいかたちでいくということ
は困難であつた。というよりも、今井が用いた「ひめゆり」を踏まえなければならぬことから、その多くを今井
作品に負わなければならないことがあつた。加藤はそれを、「ただ、内容そのものは、実際にあつたこと
すから」と語つていた。

加藤へのインタビューには、また「作者として、もつとも強調」したかつた点は何かというのがあつた。加藤は
その問いに対し、「原作の『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』を読んで思ったのは、実にさまざまな運命がある
んですね、亡くなるにしても、生き残るにしても。ほんとにどれ一つとして同じものはない。だから、それを百人
二百人の全部をやるわけにはいきませんが、なるべくそれを生かそうと……。／＼それと、生存者の一人であつ
た原作者の仲宗根先生が、ちょうど映画がクランクアップした日に亡くなられたんです。この方は、沖縄の良心と
戦後呼ばれて、ずつと平和運動をやられた方なんですけど、この方、深い悔恨があるんですね。結局、自分たち、
大人たちが、彼女たちを戦場に連れてつてしまったのではなかったかという……。その失われた命に対するほんと
に深い悔恨があるんですね。それはまさに、今につながるものですから、その先生の深い悔恨、深い悲しみが最後
に出せたらどうか、だそうと……。」と、答えていた。

加藤は、引率教師の「深い悔恨、深い悲しみ」を出そうと考えたというが、今井そして舛田の「ひめゆり」は、
何を描こうとしたのだろうか。

今井は、「私はあの作品で何よりも訴えたかつたのは、誤まれる指導者達によつてひき起こされた戦争の悲惨さ
ということでした」というように、自作について語つていた。舛田の作品については「愛も友情も戦火のために粉
砕された『青春悲劇』としてとらえた作者（舛田利雄監督）のねらいが成功しているようだ」との評が見られるよ

うに、今井の作品には見られなかった「ひめゆり部隊」と浜田光夫ら沖繩師範男子部の「鉄血勤王隊」とのあわい交情⁹⁾が織り込まれていた。今、両者を踏まえて云うとすれば、今井作品は「指導者達」を問題にし、舛田作品は生徒達に視点をあてていたということになるであろう。

加藤は、「女学生と教師の集団が主人公」という。それははからずも今井作品と舛田作品を統合する形になっていた。加藤はまた、引率教師の「深い悔恨、深い悲しみ」を出そうとしたといっているが、では、加藤はそれを出したのであろうか。

その前に、四度目の「ひめゆり」がどう受け取られたかを見ておきたい。

一九九五年六月八日付『朝日新聞(夕刊)』『芸能』欄は、「散った若い命熱くリアルに」の見出しで、「ひめゆりの塔」「ぎげ、わだつみの声」「ウィンス・オブ・ゴッド」の三作をとりあげているが、そこで「東宝の「ひめゆりの塔」は四度目の映画化である。監督が神山征二郎、脚本が神山と加藤伸代。出演が、沢口靖子と後藤久美子ら。太平洋戦争末期の沖繩で、学徒看護婦として従軍を余儀なくされた、女子師範学校と県立第一高女生徒たちの悲劇である。映画は、彼女らが逃げまどい、傷つき、死んでいく姿をリアルにつづっていく。／生徒たちをおったあげくわが身の安全を図る教師がいて、一方に生徒を見守る教師がいる。死と隣り合わせの極限状況の戦場があつて、横暴かつ非情な軍人がいる。そんな中で、少女たちは生き抜こうとする。映画は生きることの尊さを訴える」といい、続けて他の二作に触れた後で「三作ともに、あまりに重要なテーマを扱っている。作り手たちは、むなしく散った若い命に存分の涙を注いでいる。／しかしながら、三作共通して、深く心を揺さぶるものがないのはなぜだろう。どこかうわべだけのきれいなとめいているという印象はどうしたわけだろう。／たとえば「ひめゆりの塔」なら、病院に遺棄されてなお生き延びた生徒の執念にもっと強い光を当てるべきではなかったか」

と指摘していた。

加藤の「ひめゆり」が、過去三回撮られた「ひめゆり」と大きく異なっている点は、戦後にまでそれが及んでいる点である。そしてそれは、ただ単に生き残った生徒たちの戦後を写したというだけに止まらなかった。

看護婦「あそこです。長くは困りますよ」

仲宗根「はい、ありがとうございます」

仲宗根「渡久地……」

渡久地「せんせい……」

仲宗根「……すまなかつた」

渡久地「アメリカに拾われました」

仲宗根「すまなかつた」

渡久地「先生……先生に会えてうれしい。ありがとうございます」⁽¹⁶⁾

渡久地は、病院が南部への撤退を命令された際、重傷のため病院壕に残された生徒で、たとえ彼女が「処置」を受け入れなかつたにせよ、米軍の攻撃でほとんど生きている可能性はないと思われていた。それが、生き延びて、米軍の病院に収容されていたのである。渡久地が、病院壕に残される場面は次のようになっていた。

野里「もう出発だそうです」

仲宗根「防衛隊がまだ到着しない。とにかく炊事場まで渡久地を運ぼう。医療器具は置いて行け」

野里・知念・垣花「はい！」

垣花「先生、担架が使えません」

仲宗根「たぶん、患者が杖代わりに持って行ったんだろう」

知念「背負いましょう」

仲宗根「渡久地、行こう。がんばるんだぞ」

渡久地「はい」

知念「さあ」

渡久地「ごめんね。とても無理だわ……わたしはこのままで……」

野里「何を言ってるの、渡久地さん！」

渡久地「わたし一人のために、みんなが遅れては」

仲宗根「今帰仁へ帰るんだろう、さあ！」

渡久地「先生、どうか行って下さい。行って！」

仲宗根「渡久地、許してくれ！」

「渡久地」については、加藤だけが触れていたわけではない。水木洋子作では次のようになっている。¹⁾

棚田「本部前集合！直ちに移動開始！」

平良「安富、しっかりするんだぞ」

安富「豊子さん」

島袋「私につかまって……さー！」

安富「あーッ」

安富「あーッ」

島袋「良子ちゃん、しつかりして……」

平良「おぶされ！安富」

安富「ダメ……もう……このままにして行つて下さい……みんな……」

平良「安富ツ 元気をだせ！」「おいツ！医療器具どうした！運掛係り！」

仲栄間「運掛係り……」

平良「安富！行くんだ！一緒に……さ！」

島袋「良子ちゃん……」

岸本「つかまつて……私に……良子ちゃん……」

平良「元気を出してくれ！もう一度……」

安富「あーッ……目がくらむ……目が……」

仲栄間「我慢しろ！」

安富「覚悟しています……どうぞ……さよなら……」

加藤のでは「渡久地」になつていたのが、水谷のでは「安富」になつている。そしてその場面は、生徒の名前が「トミ」に代わつて、八木保太郎、若井基成、石森史郎脚本にも見られる。

玉城「比嘉！」

トミ「あ、先生……トラックは……」

玉城「まだ着かないんだ。おぶつて行こう。さ、肩に掴まつて」

玉城「我慢するんだ、さあ……」

トミ「痛い……やめて……先生！」

松永「先生！急いで下さい。生徒が出発しましたよ」

玉城「しかし——」

松永「この生徒さんはトラックでなけりや無理ですよ。我々が責任もって乗せますから——」

トミ「先生、急いで下さい。私もすぐ——」

玉城「比嘉、トラックに……乗って来るんだよ、待ってるからね、いいね」

トミ「はい」

重傷の生徒を運びだそうとするこの場面は、そのようにどの「ひめゆり」にも見られるものであるが、もちろん全く同じになっているわけではない。水木作では、そのあと平良が再度安富のところに行き、「きつと、迎えに来るから……それまで待ってくれ……食糧はかんめんぼうと缶詰が一個ずつ、ここにあるからね、若し、万一、敵がここへ来たら……君も沖繩の女学生らしく……覚悟をして……この薬を……」と食糧と自決用の薬を渡す場面が出て来たし、八木、若井、石森の脚本では枕辺の食器に「ミルク」を配るのを躊躇している衛生兵に「私にも、ください」といい、衛生兵が首を振ると「おねがいます」と哀願、やむなく注ぐと「ありがとう」とお礼を言う場面が続く。水木そして八木らのシナリオでは、病院壕に残された生徒は、配られた「薬」（「ミルク」）で、米軍の捕虜にならずに死んでしまう、といったかたちになっていいだろうが、加藤は、それをまったく新しい形にしていたのである。加藤は、なぜ前三作に共通していたといっているように、加藤生徒の扱いを、別のかたちにしたのだろうか。それを「ひめゆり」全体とかかわった形でいうとすれば、全滅する「ひめゆり」を踏襲しないで、何故生き残った「ひめゆり」を加えたのか、ということになる。

朝日評は、加藤「ひめゆり」が、過酷な状況のなかで、「生き抜こうとする」生徒たちを描き、「映画は生きる」との尊さを訴える」としながら、「どこかうわべだけのきれいごめいているという印象」があつて「深く心を揺さぶるものがないのはなぜだろう」と問い、たとえばとして、「ひめゆりの塔」なら、「病院に遺棄されてなお生き延びた生徒の執念にもっと強い光を当てるべきではなかったか」と評していたが、加藤「ひめゆり」が、他の三作と異なる大きな点があるとすれば、それは他でもなく、朝日評が欲しかったとした生き延びた生徒たちに「強い光を当て」たところにあつたといつていいのである。

「ひめゆり」は、言うまでもなく、沖繩戦がいかに無残な戦いであつたかを照らし出したものであつた。それはまた「女学生たちの悲劇が軍閥の横暴と独断によつてひき起こされたことを深く訴える」¹³のをもつていたが、その戦いの無残さや、「軍閥の横暴と独断」による悲劇を表すものとして、壕置き去りは格好の素材となつたであらうことは、「ひめゆり」四作ともに、それが見られることではつきりしていよう。壕置き去りは「ひめゆり」の定番であつたといつていいわけだが、しかし前三作と加藤作とは、その取り扱われ方が大きく異なつていた。

前三作における壕置き去りは、「ひめゆり」の悲劇が雪崩を打つていく前兆としての一シーンとでもいえるものでしかなかった。それが、加藤作では、「ひめゆり」の悲劇はまさにそこにあつたといつていいようなものとなつていたのである。なぜ、そうなつたのか。

加藤作は、水木「ひめゆり」に多くを学んだといつていい。沖繩の戦闘をどう撮るかの基本的なかたちをそこで学んだことは間違いないが、その上で、加藤は、より深く「ひめゆり」の生徒たちの手記を集めて刊行された仲宗根政善の『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』に寄り添おうとした。

「ひめゆり」は、一九四九年九月『令女界』に連載がはじまり、翌五〇年山雅房から刊行された石野径一郎の「ひ

めゆりの塔」によって、より広く知られるようになったといつていい。それは、当初「ひめゆり」の映画化が、石野との交渉で始まった^①ことからでも明らかであるが、石野のそれは、極めて戦後的な視点によって書かれた小説であった。「心の底からの自由主義者である友人荻堂雅子とともに、死の戦場をはいずりまわる」カナを主人公にした作品は、「全編至るところに戦争で人間が殺し合うことに納得しない魂の絶叫がしみわたっている」と評された。それは、「ひめゆり」の悲劇を伝えたいとする思いがとらせた一つの方法であつた。それに対して仲宗根の「ひめゆり」は、その書名からもわかるとおり「ひめゆり」の生徒たちの戦場記録を集め刊行した実録である。そこで仲宗根は「二十余万の生霊の血をもつて山河を染め、沖繩は、血の島」として世界に知られた。この「血の島」でも、とくに悲惨をきわめたのはひめゆりの学徒隊の最期であつた。わずか十六歳から二十歳までのうら若い乙女らが、あれほどに激しかつた戦争に参加して、かくも多数戦死した例は人類の歴史にかつてなかつた」といい、「この悲劇が戦後、あるいは詩歌によまれ、あるいは小説につづられ、映画、演劇、舞踊になつて人々の涙をそそっている。ところがこの事實は、しだいに誤り伝えられ伝説化しようとしている」といい、「乙女らが書き残そうとした厳肅な事實を私は誤りなく伝えなければならぬ義務を負わされている。洞窟に残した重傷の生徒たちのことを思うと、この記録は私にとっては懺悔録でもある」と書いていた。^②

「事實」を伝えるとともに「懺悔録」でもある記録、それが生徒を引率して辛うじて生き延びた仲宗根があらわそうとした「ひめゆり」であつた。そこで仲宗根が伝えたいと願つた「厳肅な事實」とは、どの生徒も「生きたい」という思いをもつていたということ、しかしながらそれを教師たちが実現させてやるのが出来なかつたという悔いであつたといえよう。その典型的な出来事が、渡嘉敷良子をめぐるいきさつであつた。重傷患者たちとともに壕に残して立ち去つたことで、もはや生きてはいないであろうと思つた生徒が生き残り、米軍の病院に収容されてい

た。そのことを知った仲宗根はとるものもとりあえず病院にかけつけ、声にならない声で渡嘉敷に「すまなかつた」とわびる。彼女は、かすかな声で「先生ありがとうございました」と答える。そして仲宗根は、病院から帰る道々こう思ったと書く。「敵として恨んだ米兵が、かえつて教えを説いた先生よりも親切であつた。渡嘉敷からしてみれば、壕にほうり捨てて去つた先生や学友よりは、救つてくれた米兵のほうがありがたかつたにちがいない。現実の結果としては、これが厳然たる事実である」と。

「ひめゆり」の「厳然たる事実」あるいは「厳然たる事実」は、ここに歴然としている。どの「ひめゆり」の映画もこの場面だけは落としてないのは、「ひめゆり」の悲劇が一つここにあつたことを見逃さないからであつた。しかし前作は、先に見たように、生徒を壕に残していくその懊悩を描くに止まつていた。それだけでは、仲宗根の伝えたいと願つた「事実」を十分に伝えたいとはいえないのではないかということに気づいたのが加藤らの第四作であつたといえよう。仲宗根「ひめゆり」をもつともよく生かしたものとして加藤作は評価することができるはずである。

「ひめゆり」の第一回作品が封切られたのは一九五三年。その話が出たのは五〇年。沖繩が日本から切り離されて米国の統治下に置かれる事が公認されたのは五一年。「ひめゆり」の第二作が封切られたのは一九六八年。「祖国復帰」運動が燃え上がった時期で、翌六九年、沖繩の返還が日程に上つた。第三作の封切られたのは一九八二年、復帰十周年を迎え、さまざまな行事が行われた年である。そして第四作が封切られたのが一九九五年。いうまでもなく戦後五〇周年の祝われた年である、というように、何らかのかたちで大きな区切り目を迎えることに、「ひめゆり」は映画化されてきたといつていい。そして、それぞれの作は、それぞれの時代を映すかのように脚色されてきたといつていいが、四作目で、初めて原作者が伝えようとした思いを結実させることができたといえるのではな

ろうか。

今井の二作目に触れて、佐藤忠男は「新しい見方で考察する価値」を強調したが、戦争体験者が少なくなっているなかで、「ひめゆり」も変わっていかざるをえなくなるであろう。そして「ひめゆり」には、すぐ近くに「殉国」という美談に転化してしまいかねないものを用意されている。「ひめゆり」は、ともすれば美談の格好な素材になりかねないもので、そのことを最も恐れたのがほかならぬ仲宗根政善であった。仲宗根は、日記のなかで書いている。「戦争体験を無にすまいとつとめて来た自分らは、それを活かそうとして一面では美化して来たかもしれない」と。戦争を記録することの困難さをこれほどよく語っている言葉はないが、それはまた、とりもなおさず「ひめゆり」を撮ることの難しさをも語るものとなっていよう。

注

(1) 『文去年鑑 昭和四十四年版』(昭和四十四年五月) 記載の「封切月日」による。ちなみに同書の脚本の項には岩井基成、石森史郎の名前しか見られない。また「日本映画一九六八年」を担当した岡本博は、「ひめゆりの塔」について一言もふれてない。

(2) 「真実に迫り得ない弱さ」『夕刊 読売新聞』昭和四十三年九月二十七日「スクリーン特集」、(平)の記名がある。

(3) 「注目すべき力作 全編にみなぎる詩情」『朝日新聞(夕刊)』昭和二十八年一月十日「娯楽」、(純)の記名

がある。

- (4) 「邦画最大のヒット ひめゆりの塔青年層圧倒的に支持」『朝日新聞(夕刊)』昭和二十八年二月五日「娯楽」。
- (5) 北川冬彦「ひめゆりの塔」『映画評論』昭和二十八年二月、第十卷第二号。
- (6) 佐藤忠男「ひめゆりの塔」『シナリオ』一九八二年七月、第三十八卷第七号。
- (7) 「私の演出態度——白石氏に答えて——」『映画評論』昭和二十八年五月、第十卷第五号。
- (8)(9) 「涙だけの青春悲劇」『毎日新聞(夕刊)』昭和四十三年九月二十五日、(K)の記述がある。
- (10) 『戦後五十年記念作品 ひめゆりの塔』決定稿、株式会社東宝映画、一九九四・十一・四。ト書きは、省略以下同。
- (11) 『シナリオ ひめゆりの塔』映画タイムス社。
- (12) 『ああ、ひめゆりの塔』準備稿、日活作品。
- (13) 『朝日新聞(夕刊)』、注2と同。
- (14) 一九五〇年七月六日付『うるま新報』は、「ひめゆりの映画化 東横と大映が計画 現地ロケで在りし日の姿再現」の見出しで、「東横専務比嘉良篤氏が記録文学『ひめゆりの塔』の著者石野径一郎(本名高安朝和、首里出身)との間に映画化の契約を本年二月締結し同社の力作『きけわだつみの声』の姉妹編としてクランクすることになった」と報じている。
- (15) 岡部伊都子「解説」『ひめゆりの塔』講談社文庫。
- (16) 仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川文庫版「まえがき」。同書は、一九五一年八月『沖繩の悲劇 姫百合の塔をめぐる人々の手記』(華頂書房)、一九六八年九月『実録 ああひめゆりの学徒』(文研

出版)、一九七四年六月『沖繩の悲劇——ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』(東邦書房)、一九八〇年六月『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』(角川書店)と、過去四度版をかえて刊行されている。版をかえるたびに、増補、改訂がなされている。

(17) 佐藤は、今井の二作目について「旧作のままの再現でいいかどうか、疑う視点はほしかったと思う」と述べ、「昔は気づかなかったことで、いまになるとよく見えるというポイントだつてあるだろう」として、沖繩と本土の関係、渡嘉敷島の「集団自決」、アメリカ軍、軍国主義教育に関し、一作目以後出来し、新しく見えてきた問題を上げていた。四方田犬彦は「沖繩と映画」(『芸術学研究』第十一号、明治学院論叢第六六三号、二〇〇一・三)で、今井の「旧作」に関し、「戦後の日本映画のなかで、沖繩に最初に照明があてられた」もので、「戦争末期の沖繩でアメリカ軍の攻撃を受け、悲惨な最後をとげた女子学生たちの物語をきわめて感傷的に描いて、大きな商業的成功を収めた」ものであったが、「当時の子供たちが皇民化教育を強いられてきたことへの批判的眼差しを読み取ることはできない」と指摘するとともに、「今日的に見てみると、今井がこの一見平和主義的に見えるフィルムを撮った隠れた意図とは、戦時中からアメリカによる占領期間を通して一度もとぎれたことのなかった、反アメリカ思想ではないかと思われる」と論じている。

(18) 「ひめゆりと生きて 仲宗根政善日記6」『琉球新報』二〇〇一年八月十二日号。